

座談会

農業の周辺から農業と自分自身を語ろう

(中)

一瞬の儲けを目指す企業化なら明日はない

藤田和芳 (大地を守る会会長) ・小松光一 (おびひろ農業塾塾長) 司会：昆 吉則 (本誌編集長)

農業の価値と可能性をもっと
広げて考えてみよう

藤田 実は本題から離れるんですけど、農業始めたという宇宙飛行士の秋山さんが、TVで話していたのを聞いたんです。人間は、言葉や目や耳とかを使って外部との関係性を作っていくわけです。しかし、年をとって目も耳も悪くなっても肌の感覚だけは残るんですって。

小松 それはそうだね。

藤田 皮膚感覚は残る。ヘレン・ケラーのように三重苦でも、肌に触られたときに、言葉はなくても「がんばってね」とかの意志は伝わるといいう。その感覚が大事なのではないか。運動というものも、百万ベンテゼを語っても、政府を批判しても、生活感覚と関係ないところで議論していても、それは空気がみたいなもの。ところがそこに、自分の肌でフィットするような伝え方のできる運動とか農業経営者が必要なんです。言葉じゃなく、皮膚感覚でもって「よし俺もやってみよう」と周りに感じさせるようなもの。そういうものを作りだす人が農村にも僅かにいるから、それを農村に育て、その応援団になっていく。そのために都市の消費者が必要だ。

小松 関係性づくりだね、皮膚感覚による。エロティシズムですよ(笑)。

藤田 もちろん、目でみるものも必要だとは思いますがね。

昆 農業というと、農家だけのもののようにいわれがちだけど、農業というものはもっと広い範囲を指す言葉にしてもよいのではないだろうか。お菓子や餅や酒なんかの加工品を作ったり、米売ったり、レストランだったり、少なくとも食品工業や流通、あるいは消費まで含めて農業というべきではないか。日本では農業展示会という機械ばかりですが、ヨーロッパではワインだとかそういう加工品の展示もすごく多い。農業の概念が、日本ではすごく狭い範囲の問題として語られる。日本では意図的にそれを狭めているところがあるんじゃないか。

藤田 日本の社会は科学万能主義です。科学というのは要素還元論で、つまり細分化ですよ。社会の専門化、細分化。お医者さんだったら、昔はひとつの病院で内科から外科から眼科耳鼻科までみんなみてくれたのが、いまはバラバラですよ。農業もたぶんそんな状況に置かれてしまっている。実は、農業の中にあらゆる産業があるわけですよ。健康なものをちゃんと食べるとなれば医学の分野があったり、生命教育という分野では教育という分野があったり、木があれば、産業でいえば住宅産業になりうる。家具だつて着るものだつて作りうる。農業の中に、農村の中に内発的に、新しい産業を興せる可能性があるのでですよ。それを米だけを作っていればいい、野菜だけを作っていればいいというところに追い込まれている。あるいは自分たちで思い込んでしまった瞬間に、自分自身で可



小松光一
昭和18年北海道生まれ。千葉県農業大学校教官を経て、御茶の水女子大学講師、おびひろ農業塾塾長。アジアと日本の農村交流と自立・連帯をテーマとして各地の青年農家たちと農村を中心とした地域づくり、国際化に取り組む。著書に「若きドン・ファーマへのメッセージ」「私の青年団改造論」「おもしる農民への招待状」「ヒト、ムラ、マツリの地域論」など。



藤田和芳

昭和22年岩手県生まれ。有機農産物産直グループ・大地を守る会会長、大地を守る会の生産者会員が作る農産物を流通する(株)大地社長。消費者への宅配の他、量販店などへの供給もすすめる。農業をはじめエネルギー、食糧、医療、環境、教育などの諸問題に対しても様々な活動をしている。農林水産業の復権を目指す全国ネットワーク・DEVANDA(デヴァンダ)代表。アジア元気大学理事長、全国学校給食を考える会顧問。

能性の芽をつんでしまっている。

昆 今、農業を産業化しようという流れがあるのだけど、それ自体は良いとしても、農水省が指導しようとしているのは、一般の産業界が昭和40年代には捨ててしまったような論理を振り回しているところがある。それと改めての支配の貫徹。ところが、ある種の農家は自分で売ることや民間の新しい流通に触れることを通して農水省の思惑とは別に目覚めてきちゃっている。

これまでの基準から離れて自分の力と責任で生きていく

小松 産業といっているながら、産業として成立している農業は、一割とか限定されますよね。限定されちゃうと、農水省なんかは、自分の領域が狭くなるわけ。分業化させながら、彼等の支配のテリトリーはでかく考えているわけ。だから現場は混乱するわけです。そして産業というのが頭にあるから、多くの農家は脱落だと思ってしまう。

この間、兵庫で「儲かる農業経営」という講演をさせられたわけ。そのとき、一番儲かるのは公務員の兼業農家だといったんです(笑)。何もたんぼで働いて稼ぐ必要はないわけ。それは本人の考えですよ。俺は公務員やりながらね、それも農業経営、あるいは農家経営ですよ。むしろ「農芸」といったほうがわかりやすい。それでいいのだと。

昆 まったくその通りで、今や純粋

な農村や農家なんてものはほとんど存在していないのですが、農村にいる元農家という人は、日本の中では今後もしっかりと生活の安定した階層になっていくと思う。今でもそうですが、むしろ、大変なのは農家でなく僕自身も含めた農業関連業者なんです。ましてや自分では何も作り出せないお役人や農協や農業団体は居場所なくなってきたいるんですね。寄生する先を失うわけですから。

むしろ、これからの世の中では暮らしても商売も農村の可能性は大きいわけですよ。そのことをもつと目ざとく気づいて、えげつなく…、えげつなくなくてもいいから、やろうよ、楽じゃないけど、おもしろいよ、と。そういうことって、もつといていいんじゃないかなあと。だって藤田さんのところ、200億円なんです(いいじゃない)。

藤田 離脱すればいいんですよ。離脱するというのは、自分の力で生きていくことだから、有機農業やるとなれば

ば、農協から離れる、農薬会社から農薬買わない、肥料は自分の近辺の50キロ圏内から有機質を集めてきて堆肥を作るとか、農業資材は自分たちで業者を集めてきて、流通だつて自分たちで構築する、買ってくる人たちも自分たちで消費者を組織するとか。こうなつてくると専門家だけの領域だけでは駄目で、モノカルチャーでは駄目なんです。離脱するといってもアナキーになるというのではなくてね。

小松 各地のいわゆる第3セクターを見てるとね、温泉掘って、それで客を呼ぼうといつて、ホテルまがいのものを作る。誰も経営者がいないから3セクを作つてやるわけです。で、役場の町長が社長になって、もともと、地元「経営者」がいないわけですよ。無責任理事会みたいなものを作つちゃつて、人件費といえは役場の職員を出向させるだけ。これは農村のバブルだと思っただけ。そこにリゾート法などもからんでくる。農業をめぐる構造

藤田氏は、昭和50年から有機農産物の産直グループの設立に参加して以来、農業と食べ物問題に取り組み、同時にそれを市民運動から事業として展開させてきた。一方、小松氏は千葉県農業大学校の教官をする傍らで各種メディアや講演、全国各地の地域活動において、農業青年たちに自立を働きかけてきた、文字通り体を張った教師である。この二氏とともに農業の周辺にいる農業関係者として、農業、産業界、そしてそれにかかわる者としての自分自身について話してみた。世に語られている農業問題というものが、実は農業関係者問題なのであり、その自問なしに農業問題は語れないからである。



と同じで、こういうことが行き詰まってきたと思う。世間には出てこないからみんな知らないとは思うけど、住専みらいに出てきたら、選挙でおっこつちやうと思うんだよね。町の金を使うときに、経営ということが問われるはずなのに、それが不在なんだ。

昆 そもそも補助金いくら落としても、俺がやるという人間が出てこないうちは、できやしないんだっていうことがね。

福祉国家というのは主体性を無くさせていく仕組みか？

小松 藤田さんも自治体に頼まれた第3セクターの社長をしているのですよね。

藤田 それを引き受ける時に申し上げたのですが、議会の長が専務になるとか、姥捨山のような3セクにはしていただきたくない、必要のないもの売るとかもね。村の生産物を加工して、ちゃんと利益があがって、一年目で赤字がなくなるというのではないにしても、将来経営が安定したら、私は社長を降りたい、と(笑)。

昆 今の話もありまえることなんですけれどもね。

小松 しよせんは人の金だから、というのでしよう。日本は福祉国家でやってきたでしょう。

昆 ははあ。

小松 金をかき集めて、サンタクロースのように配ってやるぞと。福祉国家っていうのは、どう逆立ちしたって主体性とか経営者意識を生まないですよ。福祉国家というのは国民統合のための文化戦略策だと思っけど、統合されるといふことは主体性を無くさせていく仕組みじゃないですか。3セクの宿なんて、出向した人間の都合でしか営業されていないから、サービスなんてない。働いている人間も人の金だから粗末にしてしまう。

昆 だからそこで、お客さまという言葉を使おうといっているんですよ。それで、ありがとうございますといった回数が多いほど、自立できていくんじゃないかと思っんですよ。自分の体験からも生きていく実感もある。お金は結果ですよ。でも良い結果をだそうとして人は必死になる。

藤田 自分のやったことが成果として帰ってくるというか、労働の結果がちゃんと見えてくるというか、ちゃんと循環することって大事だと思う。第3セクターじゃないけど、赤字なのか黒字なのか知らされずに、自分の働いたことの結果を何も見えなくて。

小松 つまらないよね。

昆 農業の中で、今まで篤農がもてはやされて来たわけでしょう。彼らはまさにそう誉められて搾取され続けてきた。誉め殺しです。もう誉められるな、と。



小松 偉いね、といわれてもボランティアじゃないからね。

昆 やっぱ、お金のことがいえないとダメですね。だけど、世の成功者といわれる人の人生を聞いたりしているよね、ちゃんとした成果を上げている人って、案外、お金のためには働いていないですよ。

小松 だからといって、お金なんかどうでもイイというわけでもない。

昆 バブルがはじけたときに思ったのは、ものすごくマトモな店主や自営業者やお百姓さんが、銀行なんかに乗せられてひっつかかっている。なぜこんな人かと思うような人もいる。それをノセた銀行もひどいなと思うけど。大企業の雇われ経営者でもなく、ちっちゃな自営業者の健康さやマトモさってのが大事なのではないか。百姓を含めた自営業者がマトモであつてくれる社会って、すごく健康な社会なんじゃないかな。彼等はカッコ付きの「正義」ではなく、「あたりまえさ」で判断し、生きるから。

利己主義と利他主義だけでは経営も暮らしも行き詰まる

小松 大地が株式会社になったとき、一部の市民運動家から叩かれたりしたのは、その辺がからんでいるような気がする。ボタンをかけ違えたんじゃないのかと。彼等の「正義」から自由になった大地を理解できないし「経営」を理解しようとしなかった。彼等にとつて「株式会社」はそれだけで悪だったのですね。

昆 大地は運動ですか、事業ですか。藤田 その「統一」ですね。経営と運動を統一させよう。

社会的に、組織としては、運動というのは、経営がないといくらでも過激になっていくじゃないですか。ところが、他者との関係性も尊重しなければならぬとなると、どこかでやはり、収まるどころを探すんですよ。ある意味の妥協論ですけど。運動だけやっていると過激になる。経営だけ考えていると単なる金儲けにな

農業の周辺から農業と自分自身を語ろう

(中)

一瞬の儲けを目指す企業化なら明日はない

る。その辺のバランスを考える。生活と「生きざま」みたいなものの統合ですね。奥さん子供を路頭に迷わせて、一銭も稼げない社会運動というのは決してホメられた姿ではない。逆に社会的なことと理想の実現を追わず金儲けのことだけしか考えていないと説得力ないわけですから。経済と経営、経営と運動というものを両立させたい。生活と生きざまを一所懸命統一させる組織であり、個人でありたい。

昆 長続きしている企業というものは、理念がしっかりしているものだと思います。時代や社会のなかでの存在理由みたいなものを確かめられるような企業。特に製造業や商業で残っているところは、強烈な理念があり、確かに企業なんだけど、運動であり、経営である、経営という言葉の中には、もともとそういう側面があるのではないか。

藤田 儲かるか儲からないかは別にして、今日の社会のきわめてはつきりした特徴は、利己主義と利那主義ですね。今さえよければというのが利那主義で、利己主義は自分さえ儲かれば、環境問題も農業問題も利那主義的に3代あと5代あとはどうなるか、という議論ではなく、

今さえよければ。しかし企業の存立基盤も、利己主義だけではもうもたないト。

昆 成り立たないですね。

藤田 成り立たないわけです。お客様がいて自分があつて、そして社会の中で存在としての自分があつて、

小松 市民性みたいなものだね。

藤田 それではじめて持続可能なわけです。利那主義が成立しないのも、バブルのように3年間は儲かるけど5年後につぶれてしまうというのはですね、長い目で10年間、儲からないけれども着実に生きていけるというのでは。最初の年は100万儲かって来年は80万、60万、30万、10万といくと、毎年20万の利益がとれあえずあるという生き方。経済の持続感を考えたときに、トータルでどれだけ利益が上がるかというのが、正しい経済学だと思つて。

古典的資本主義を後追いする農業企業論ではだめだ

昆 地力という概念があるでしょう。世の中の人にはなかなか理解しないけど、すぐれた農業経営者は必ずそれを持つて

いる。銀行や農協なんかに貯金しなくても地力に貯める、あるいは地力を高めることにこだわっている。それは土の地力ということもあるけど、お客や取引先や社会との関係なんかすべてを含んだ経営力という意味のようなもの。

ところが、今、行政のリーダーたちが、新農政だとかいつているのは、日本の産業界が昭和30年代に捨てたような論議を、農家に押し付けようとしている。話にならないようなことをね。

小松 農業の企業化は単なる金儲けの手段としか教えていないのね。もっと企業化のためのスピリチュアルなものとか、事業のための解放性・持続性のようなことをいわないで。これからは「儲かる論」が必要だとね。

藤田 金さえ儲かればいいのか、と。

小松 ドラッカーが『ポスト資本主義』でいっているんだけど。資本主義というのは、既に崩壊しつつあるんだよね。資本主義ではなく、違ったスタイルの世界の在り方に移行している。農業が、古典的なスタイルの資本主義を後追いしているところがあつて、しかし20年ぐらい前から、資本主義というものはなくなつてきているわけです。おそらくもっとこれからドラステックに変わつてきて、もっと違う世界になつてしまふと思つてますね。資本が国家を越えていって、国民国家みたいなものが崩壊するだろう。グローバルになればなるほど、リージョナリズムと部族主義が大事になつてくる。彼がいつているのは、イタリヤのある地方の、文化を大事にする人達、というよう。たとえば、俺は米沢郷でこういう暮

らしをして集まつて生きていっちゃおうぜと。リージョナリズムや部族主義がなくて、ただグローバルなリズムなら、崩壊するんじゃないですかね。

藤田 画一社会ですね。

小松 ある記者が「地球市民」ということで話したいというのだけど、「地球市民」という言葉はおかしいんじゃないかと思つてます。実際に海外国際交流などやっている人をみんな見ていると、都会の人間がアジアの農村に行っているんなことやつて、あたしたち地球市民だね、とやつている。市民というのは基本的に自分たちでコミュニティを作る人間を市民といいますよね。それが単なる都市漂流民がね、アジアとかアフリカに行つて井戸を掘つたりしてる。もつと本拠地を持った人を語れと記者に話した。

藤田 NGO漂流民ね。

小松 本場に地球市民というならね、農村とか。

藤田 共同体とか。

小松 そういうものを大事にする。

藤田 存立基盤がはつきりして、本拠地がある。

昆 同じ問題が日本の農業を語る時や人にもあるわけですね。(続)

